



特定非営利活動法人 市民シンクタンクひと・まち社
〒160-0021 新宿区歌舞伎町2-19-13 A S K ビル 601
TEL 03-3204-4342 FAX 03-6457-6202
E-mail npo@hitomachi.org URL : http://www.hitomachi.org
郵便振替口座 00170-6-410791 市民シンクタンクひと・まち社

旧満州への旅をして その2～長春の一日～

市民シンクタンクひと・まち社理事 木下伸子

6月12日はいよいよ長春。前夜遅くにホテルに到着して、先に着いていたY・C夫妻と合流し、9:30ガイドのK氏が現地ガイドのT氏を伴って現れスタートした。T氏は60歳代後半の男性、私がここで生まれ育ったと聞いて、戦後生まれではあるが、長春育ちで歴史も知っている彼に、K氏が現地ガイドを頼んだのだそうだ。

☆育ったところは・・・

中国の自動車産業の地、長春市は、旧満州帝国の首都で当時、新京と言われたところ。父が政府の職員だったので、私は官舎で育った。戸籍謄本には、新江市安民区進化街に住んでいたと記載されている。近くに公園があり、鉄道線路までも近かったと憶えている。ここで妹も生まれた。父は応召し、終戦でシベリヤに抑留された。

戦後、内戦が起り、毛沢東率いる八路軍と蒋介石の国府軍の市街戦が官舎からそんなに遠くないところで行われていた。日本の敗戦で、帝国は崩壊。役所からの給料がなくなっただけで、着物などの売り食い生活をしていたが、母は、見よう見まねで田舎饅頭を作り、その戦場に私を連れて売りに行った。「ニー、マントウ ヨウプヨウ(お饅頭いりませんか?)」と、八路軍の兵士に、私が売り子になって声をかけて歩いたそうだ。その大通りはどこだろう、行ってみたかったが私の知っている目印はなくなっておりわからなかった。

☆チェンピン食べた

進化街に住んでいたと、予め知らせていたので、T氏はホテルから西の方の進化街という標識がある交差点に案内してくれた。「昔日本人街だったそうです」とT氏が言う街の道路



沿いには昔ながらの中国人の営む商店が並び、その裏側は、どこも建設用の重機が稼働しているだけで、昔を偲ばせる建物はなかった。「何か欲しいものは」と聞かれるので「チェンピンが食べたい」というと、「煎餅」と看板のある薄暗い店に行き、中の女性が「できるよ」と答えてすぐ作り始めた。

チェンピンは、トウモロコシの粉を水で溶いて、丸い鉄板に薄く延ばして焼いた皮に野菜炒めなどを包んだのがおいしかった思い出の食べ物。中国式クレープだ。ここでは刻み葱と甜面醬のような味噌を塗って折りたたんでくれた。これが一般的な煎餅だそうだが、ようやく幼いころに出会った気がして、大事に大事に食べながら歩いた。

☆長影旧址博物院見学

長春は、いわゆる観光資源は多くない。その一つである長影旧址博物院は、「満映」と呼ばれる旧満州映画会社の撮影所跡地に造られている。そこには、満映時代の撮影道具が展示されていたり、新中国建国後、長春映画撮影所として数々の映画を製作し、中国映画を牽引してきた歴史を伝えている。終戦後、満映の技術者など日本人が残り中国の映画づくりにノウハウを伝えた様子も展示されていた。

☆偽満皇宮博物院見学

帝国時代の官庁街に、当時の政府や軍の建物がそのまま、現政府の役所や病院、学校などになっているが、中に入ると見学はできない。車窓から眺めながら、偽満皇宮博物院に向かった。皇宮はラストエンペラーとして知られる愛新覚羅溥儀を皇帝として満州国を建国した時、新宮殿を造るまでの仮宮廷として造られた。北京の故宮の6分の1のスケールで建設されたとか、執務室も応接室も寝室も質素で、きっと窮屈な生活だったろうなど気の毒に感じた。新宮殿を作る前に太平洋戦争になり、帝国が崩壊した。予定地だったところにも、何が建つのか、クレーンの姿が見えた。



「長春、長春」と思い焦がれていた長春の旅も、この一日で終わりだ、翌日は朝早いので、ホテルに戻り、近くのレストランで食事をして解散。(続きは次号)